青年期におけるASD特性と自己肯定感，ソーシャルサポート，幸福感との関連

22004FRM　寺田　涼香

キーワード：ASD，自己肯定感，ソーシャルサポート，幸福感

Ⅰ．問題と目的

自閉スペクトラム症（ASD）は，相互的なコミュニケーションや限定された反復的な行動，興味によって特徴づけられる発達障害である。ASDの特性は重度から軽度までスペクトラム状の広がりをもち，非ASD者においても存在しているとされる（神尾他，2013）。

一般的に自己は，社会的な経験や活動を通して意識され，他者との関係形成の結果として発達する（Mead，1934）ため，自分自身についての理解は，他者との関係性や他者への理解が必要不可欠となる。一方でASD者は，非ASD者のように他者と自分を比較し，自己を対人関係の中で認知することが困難であるとされている（菊池，2009）。また，Bauminger et al.（2004）はASD児における自己評価が，孤独感，友情の質とどのように関連するか検討した結果，ASD児は自己評価を高く認識しているほど友情の質を高く認識し，孤独感が低いことを明らかにした。このことから，ASD者にとって自己評価が高いことは，心理的な適応に必要とされる友人の質の高さや孤独感に影響を与えるといえる。

一般的に，家族や友人のサポートの知覚が，ストレスの緩和などに影響を与え（嶋，1992），ソーシャルサポートを受けることで集団に適応していく。一方で，ASD傾向が高い者は，視覚的にわかりづらいサポートはサポートとして知覚しづらいことから，不適応に陥りやすい（金井，2010）。

以上から，ASD傾向と自己肯定感，ソーシャルサポートとの関連は重要であると思われるが，実際に検討した研究は少ない。そこで本研究では，ASD傾向をコミュニケーションや認知のあり方に関わる心理社会的な特徴であり，一般の人にも共通してみられる特性として捉え，ASD特性，自己肯定感，ソーシャルサポート，幸福感の関連を検討することを目的とする。

Ⅱ．方法

1. 調査対象者と手続き：大学生，大学院生を対象にWebアンケート調査を503名に実施した。回答不良者と，AQ日本語版で33点以上であった者を除外し，118名（平均20.14歳，$SD = 1.31$）を分析対象とした。

2. 質問項目：①AQ日本語版（若林，2004）の5因子50項目，4件法，②大学生用ソーシャルサポート尺度（片受・大貫，2014）の3因子23項目，4件法，③自己肯定感尺度ver.2（田中，2005）の1因子8項目，4件法，④心理的well-being尺度（西田，2000）の6因子43項目，6件法，⑤フェイスシート（年齢，性別）から構成された。

Ⅲ．結果と考察

1. 尺度の平均得点の t 検定の結果

ASD傾向得点の平均値（19.38点）より上をASD傾向高群（63名），下をASD傾向低群（55名）として分析を行った。両群の尺度得点における t 検定の結果はTable1で示す。

Table1　両群の尺度得点の平均値と標準偏差，高群と低群の平均値の差

	ASD傾向高群		ASD傾向低群		平均値の差	
	M	*SD*	*M*	*SD*		
AQ合計得点	25.159	3.903	13.727	3.679	11.431	***
社会的スキルの低さ	6.302	2.160	2.818	2.161	3.483	***
注意集中の問題	6.270	1.706	3.764	1.515	2.506	***
細部への関心	4.397	2.099	3.673	1.876	0.724	
コミュニケーションの苦手さ	4.746	1.849	1.891	1.436	2.855	***
想像力の低さ	3.444	1.711	1.582	1.287	1.863	***
自己肯定感	19.254	5.562	23.436	5.301	-4.182	***
ソーシャルサポート					0.000	
家族の評価的サポート	24.984	6.124	29.509	5.731	-4.525	***
家族の情報・道具的サポート	21.444	4.724	23.200	3.889	-1.756	*
家族の情緒・所属的サポート	18.317	4.842	20.345	3.663	-2.028	*
友人の評価的サポート	30.730	5.574	34.691	4.546	-3.961	***
友人の情報・道具的サポート	21.667	3.637	23.782	2.998	-2.115	**
友人の情緒・所属的サポート	20.698	3.019	22.400	2.424	-1.702	**
幸福感	130.857	25.594	150.236	21.964	-19.379	***

***$p < .001$，**$p < .01$，*$p < .05$

2. AQ，自己肯定感，ソーシャルサポート，幸福感の関連

重回帰分析の結果をまとめたものを Figure1，Figure2 として示す。自己肯定感が AQ，ソーシャルサポート，幸福感へ及ぼす影響について，高群では，自己肯定感が高いほど家族からの評価的サポート，情報・道具的サポートを知覚しやすくしており，友人からは情緒・所属的サポートを知覚しやすくしていた。ASD 傾向が高い者にとって，自己肯定感の高さは家族と友人で異なるサポートを知覚しやすくしていたことが示された。低群では，家族・友人の評価的サポート，幸福感に対して自己肯定感が正の影響を及ぼしていた。ASD 傾向の高さに関係なく，従来持っている自己肯定感の高さがサポートの知覚，幸福感を高めるためには必要である可能性がある。

AQ が自己肯定感，ソーシャルサポート，幸福感へ及ぼす影響について，高群，低群共に，AQ と自己肯定感との間に関連はなく，自己肯定感に影響する要因には ASD 特性以外にも多くの要因が関わっている可能性がある。高群では，細部への関心が高いほど評価的サポートを知覚しやすく，幸福感が高まることが示唆された。岩佐・酒井（2021）は，ASD 傾向とソーシャルサポートがレジリエンスに与える影響を検討しており，ASD 特性の中で細部への関心の高さは他の特性とは異なり，家族の評価的サポートを多く認知し，レジリエンスに対し直接的な正の影響を示していることを明らかにしている。ASD 傾向が高い者にとって細部への関心の高さは他の ASD 特性とは異なり，ポジティブな働きがある可能性がある。山下他（2017）は，自己受容の過程を調べた研究の中で，ASD 者は自身の障害特性を自己の特性として認め，過去の障害特性による経験をポジティブに捉え，ありのままを肯定する体験によって自己肯定感を獲得していることを明らかにした。本研究においても，ASD 傾向が高い者について，細部への関心といった ASD 特性の高さサポートを知覚しやすくし，一部の ASD 特性の高さは，メンタルヘルスにむしろ良い影響を与えていることが示唆された。低群では，社会的スキルの低さ，注意集中の問題が友人の情緒・所属的サポートに負の影響を示していたことから，友人のサポートを知覚するには，友人など他者と関わる必要があるため，社会的スキルの低さ，注意集中の問題は友人のサポートを知覚しにくくする可能性がある。友人との間では，周囲の状況に注意を向けたり，会話に注意を払って聞いたりするなどの行動ができることで友人からの評価を得やすくなり，友人と関係を築くことで優しさや思いやりまたは誰かと一緒であるという実感を得ることができると示唆される。

また，ASD 傾向高群・低群共に，自己肯定感は幸福感に正の影響があり，高群は低群よりも自己肯定感が低いことが明らかになった。しかし本研究では，高群における自己肯定感に影響を与える因子を見つけることはできなかった。ASD 傾向が高い者への支援を検討していく上で，自己肯定感をどのように高めていくかを明らかにすることが今後の課題である。先行研究では，ASD 傾向が高い者は，自己を捉えること自体が難しいことが指摘されている（菊池，2004; 十一・神尾，2001; Williams, 1992 河野訳 1993）。したがって，自己理解が正しくできているかどうかも面接法などを用いて調査する必要がある。

Figure1
ASD 傾向高群における重回帰分析の結果

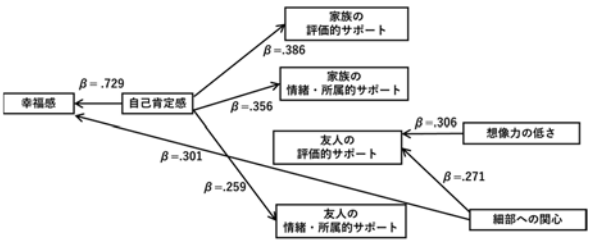
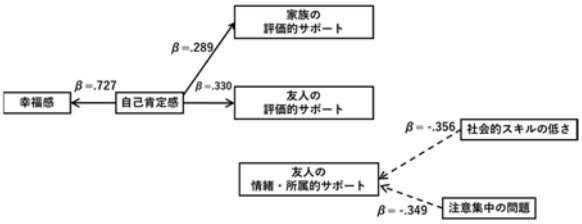
Figure2
ASD 傾向低群における重回帰分析の結果